

## 宝山寺絵図と宝山寺文書による配置復元と獅子閣に関する視覚的考察

建築デザイン研究室 A97T418 田中昭臣

### 1. 研究の目的と背景

明治初期、本格的な西洋建築が日本各地に伝播する以前に、外国人居留地にある洋館の真似をした日本人棟梁による擬洋風建築といわれるものが多数、各地に建てられた。それら棟梁による洋風解釈は多種多様であり、故に擬洋風建築の表現も豊かなものになった。居留地から遠く離れた大和・生駒山の中腹にある宝山寺にも獅子閣という擬洋風建築が建てられた。擬洋風建築は建物単体としては意匠上の、もしくは技術上の観点から、あるいはそれらの伝播という観点から語られることが多い。建物単体を見ると当然そうなのであるが、寺院境内という宗教空間ではその配置関係にも明確な意図があり、表現の対象とされ得る。

本稿では、宝山寺絵図と宝山寺文書により境内の配置復元を行い、擬洋風建築である獅子閣がいかに配置付けられたかを視覚によって考察することを目的とする。尚、同研究室の矢本宏君と共同に行った。



獅子閣外観



獅子閣懸造

### 2. 庶民信仰・懸造・視覚

宝山寺は修験に関係の深い湛海律師（たんかいりっし）が 1678 年に創建した寺で、本尊は不動明王である。しかし、化政期（1804 年～1830 年）からは不動明王信仰よりも歓喜天信仰が前面にあらわれる。歓喜天とは、何でも叶えてくれるという現世利益の権化のような神である。以降その神格ゆえに大阪の庶民の信仰を集め、明治期の排仏棄釈の中でも宝山寺は逆に飛躍的な発展を遂げる。そんな中で明治 17 年、宝山寺お抱えの棟梁・吉村松太郎によっ

て獅子閣が建てられる。その用途は迎賓館であり、その形態は懸造<sup>1</sup>（かけづくり）という特殊な立体床下架構を持ったものであった。

懸造は平安前期に発生し、傾斜地に建つという単なる物理的理由ではなく、修験などで信仰対象の岩や岩窟を祀り、それに密着するという宗教的なものであるが、近世以降は建物前面一間だけのものや、人工の石積の上に建つ極めて形式的な例も現れる。それらの多くは有名な京都の清水寺や滋賀の石山寺を写したものであった。

一方で、近世は鎖国という状況ではあったが開港地を中心に西洋の望遠鏡やカメラ・オブスキュラ<sup>2</sup>などの視覚機械が出回り、庶民の間で浮世絵等を通して広まった時期であった。それは、機械による直接的な視覚操作のみならず、遠近法など、西洋の解剖学的把握の浸透と共に起こった。懸造はその形態故に舞台上から眺める視覚あるいはその架構を見る視覚と容易に結びつき、それまでの自然に埋もれるような趣から、長崎の清水寺に代表されるような舞台上からの遠望を意識したものになる。そこからはパノラマ的景観が広がっていた。

パノラマとは遠近法の正確な奥行きと水平方向の視点の移動を組み合わせたもので 18 世紀末に西洋で生み出された概念であり、日本には 1890 年に伝わる。しかし、西洋でパノラマが産まれたのとはほぼ同時期に日本でも「平臨する」といったパノラマに近いと思われる概念が生まれ、蘭画等の遠近法と共鳴した<sup>3</sup>。

### 3. 前期（1804 年以前）の境内配置

境内の配置形態は 1804 年の歓喜天堂の移動を境に大きく二つの時期にわけられる。図 1 にみられるように、1804 年以前は本堂と歓喜天堂は共に正面を南東に向けた配置形態であり、明らかな軸線概念がある<sup>4</sup>。また、1791 年の絵図では歓喜天堂の床下架構を懸造で描かれており、歓喜天堂移動後の 1898 年の絵図では歓喜天堂があった場所だけが人工の石積ではなく、自然の岩で描かれていること等から<sup>5</sup>、その軸線は宗教的な意味が強かったと考えられる。

また、1802年の絵図では図1に記した寮舎も懸造で描かれている。その存在は明確ではないがそちらの方の懸造は人工の石垣の上に作られた形式的なもので宗教的意味は薄く、むしろその架構の位置が境内へ昇る階段の脇という目立つ場所あることから、参拝者への視覚的な効果が強かったと考えられる。

#### 4. 後期（1804年以降）の境内配置

1804年の拝殿新造、1805年の歡喜天堂移動、1844年の観音堂再建以降、それまでの配置形態は一変し、図2にみられるように軸線概念はなくなり、境内を囲むような配置になる。その境内の景観はそれまでの宗教色の強い軸線の効いたものではなく、建物を一望できるというパノラマ的なものになっている。歡喜天堂移動には現世利益という民衆のニーズに答えようとした庶民信仰の寺・宝山寺の特性がみられる。後に獅子閣が境内北東の隅に建てられるが、外観を洋風にした一因として明治初期の庶民のニーズに応えようとしたこともあげられる。

#### 5. 参道からの景観と獅子閣

宝山寺への参道は境内東側・惣門からの道のりだけではなかった。1802年の絵図には境内南門から抜ける道に「大坂道」という記述があり、宝山寺にある丁石と生駒山頂の経塚（宝山寺の第6代住職が経を埋めた場所で宝山寺の所有地である）にある丁石の形態が同じことや、その由来から大阪へぬける道の存在が確認される。その道のりは峠越えという厳しいものであったと予想される。1891年の絵図によると宝山寺の南側について参拝者は境内へ行くに二つの道があり、一つは境内東側の惣門に抜ける道でもう一つは南門から境内に入る道である。境内に入ったときの景観は前途の通り前期と後期で大きく異なる。惣門へ下る道のりの途中、それまで木々に隠れていた獅子閣が目に入る。

宝山寺への参道は東側の惣門からの物が主であった。惣門付近からは三方を山に囲まれているという地形的な特徴からくる仰ぎ見るような景観が予想される。それは宝山寺創建以来のもので、それ自体はほとんど変化していない。しかし、先述の寮舎の懸造や境内のパノラマ的変容と共に獅子閣の建設をみたとき、惣門からの参拝者の視点を意識した表現がなされていると考えられる。現在は獅子閣と惣門の間に大きな建物が建てられて十分に見えないが、当時の惣門からの景観は地形とそれに添って、寮舎や獅子閣などが配置されたパノラマ的景観であったことが予想される。そして、そのパノラマの一つとして懸造の架構部分や、獅子閣のベランダ・洋風意匠といった珍しい要素が配置されたと考えられる。

#### 6. 結論

配置復元の作業と、その他の資料による考察によって宝山寺においての洋風建築の成因が多少なりとも明らかになった。それは、パノラマ的景観という西洋的要素をふくんだもので、参拝者の視点を意識したものであった。そしてそれらを受け入れたのは軽快な庶民信仰であった。

#### 謝辞

今回御指導いただいた宝山寺の築部章造氏、元興寺文化財研究所の吉井敏幸氏、日本建築意匠研究所の松崎照明氏に深くお礼を申し上げます。

<sup>1</sup> 松崎照明『古代・中世の懸造-懸造建築の研究その2』（日本建築学会論文報告集 第419号 1991.1）、『懸造の近世の変容-懸造建築の研究その3』（日本建築学会計画系論文集 第485号 1996.7）による。  
<sup>2</sup> カメラ・オブスキュラとは暗い箱の中の側面の一点に小さな穴をあけ、外の風景を内部に結像して写す仕掛けのことで、手にとれる大きさの物からひと部屋規模の物までであった。  
<sup>3</sup> Tスクリーチ『江戸の思考空間』（青土社 1998年）による。  
<sup>4</sup> 軸線に関する宗教的分析は矢本宏君の「宝山寺獅子閣の宗教的分析と獅子閣に関する考察」に詳しく記載されている。  
<sup>5</sup> 本稿2参照

